

不可逆な六八年

吉川勇一

一九六八年の年明け早々、私は一万枚

の英文のカラーチラシを抱えて、小田実さんと佐世保に向かった。私は三十六歳、小田さんは三十五歳だった。チャーターするつもりでセスナ機で、佐世保に入港してくる米原子力空母エンタープライズの甲板に、空から、ベトナム反戦・イントレピッド号の四人に続いて脱走せよと呼びかける英文のチラシを撒こうという計画のためだった。大村空港まで出かけて交渉し、大阪の会社にまで連絡したが、ことごとく断られた。撃墜されたらどうするんだ、という返事まであった。こうして計画は挫折し、チラシは上陸してくる水兵に陸上で撒くことになったのだが、私たちは、本気で空から撒くこと

を考えていたのだった。

こうして始まった六八年は、表の行動としては、大きなデモ（六月一五日、東京での市民デモには一万二千人が参加し、数寄屋橋交差点では二〇分の座り込みも行ったし、翌六九年のその日のデモで、私も逮捕されるが、東京でのデモは参加者六万人となった。また、東京・北区の米野戦病院反対のデモも連日のように続いた）や、集会（八月、ベ平連は京都で「反戦と変革のための国際会議」を開催した）などが熱気をもって続き、表面に出ない裏のほうでは、続々と出てくる米脱走兵を匿い国外に脱出させる行動で、ほとんど寝る暇もないような日々が続く数年間の始まりだった。

冷静な議論や判断に基づいたものでは

なかったが、自分たちのこうした行動によつて、世界と日本の政治や社会を変えてゆくことが出来るのだという期待に満ちた空気が、行動に参加する人びと、特に若者たちの間には共有されていた。人生の中で、こうした経験をもてたということ、実に貴重なことだった。六八年を中心とする数年間の経験は、私のその後の一生涯を規定するものとなったのだから。いや、個人に限らず、この時代を反戦運動で共有した人びとの多くは、そういう思いを持っただろう。少なくともベ平連など市民運動に加わった人びとの多くにとつては、そうだったに違いない。

武藤一羊さんは、かつて、この時代に起きた運動と人びとの意識の変容は、不可逆進行のものだと表現した。一時的には高揚したが、それが過ぎ去ったので前の状態に戻った、などということがある。歴史的な変容なのだと。私もそれに共感する。市民社会への理解、その中での人間としての生き方、社会主義諸

国や左翼政党についての評価、平等や差別に対する認識、国家や法についての理解などだが、それまでの五〇年代の運動のもつていたものと根本的に異なるものとして認識されたのであり、それは状況が運動にとって不利なものに変わろうとも、元に戻るといえるものではなかったのだ。

数年前、一九六八年を取り上げた論者が何点か出たが、その中には、ベ平連の中心メンバーには共産主義労働者党の幹部が多数おり、鶴見俊輔や小田実といったような代表的顔もそれに利用されているに過ぎず、基本的には、ソ連の「平和共存」世界戦略に沿ったものだった、というような論もあつた。噴飯ものと言うほかはないが、こういう論者は、さきにも述べたような「一九六八年」が象徴する考え方、生き方の大変換がまったくわかっておらず、依然として五〇年代までの「前衛党」観のまま論じているのだ。

世界と日本の政治や社会を変えてゆくことが出来るのだという期待に満ちた空気が共有されていた。こうした経験をもてたということは、実に貴重なことだった。

もちろん、今から思えば、あの時こうすればよかった、こうしたらどうだったろうという思いはいくらでもある。六八年には、その後の運動の退潮、いや崩壊をもたらす要因もほとんどすべて出そろっていたと思えるからだ。日本の運動が直面していた様々な問題は、決して日本独自のものでもなかった。アメリカの反戦運動もほとんど同質の問題点を抱えていた。私は後からそれを知って、あの時もっと国際的な経験から学ぶべきだったと、ほぞをかむ思いもした。

アメリカで、非暴力のデモ（例えば六七年一〇月二日の国防省包囲デモ）の即時的効果のなさに幻滅した若者たちが、過激な爆弾闘争に入ってゆく経緯（例えばウェザーマンの登場）を、私はアメリカの活動家D・デリンジャーの自伝を訳す中で知って、そういう思いを強くした。だが、そのデモは、国防省内でそれを目撃して

いたダニエル・エルズバークに決定的影響をあたえ、戦争終結に大きな力となる国防総省秘密文書の公表をもたらすことになるのだ。（D・デリンジャー『アメリカ』が知らないアメリカ 藤原書店、三四五頁以下）。

また、若くして亡くなった鶴見良行さんの著作集の編集にかかわり、ベ平連の初期に鶴見さんが展開していた、二世紀の今でも新鮮さを失っていない論考を読みなおし、なぜあの時、彼の提起をもつと真剣に運動が受け止め、取り上げられなかったのか、という思いも強くある（『鶴見良行著作集』第2巻『ベ平連』の解説参照。みすず書房）。

歴史に「IF」を持ち込むのは無意味とはよく言われることだが、この時代の運動の歴史的総括としては、こうした問題も焦点の一つになっていいのではないだろうか。